SE：ドアをノックする音

SE：ドアを開ける音

…あら？

どちら様ですか？

#追い返そうとするが、来客の顔を見て呆然とする

申し訳ありませんが、今日の告解の時間は、もう終わって…っ！？

ゆ、勇者様…勇者様なのですか…？

どうして、貴方がここに…。

…え？

私に、一目会いたくなったから…ですか？

よ、よく分かりませんが、とにかく、中に入って下さい…！

こんな所を見られたら、一大事ですから…。

SE：慌ててドアを閉める音

#暫し逡巡した後、おずおずとした感じで促す

…っ。

と、とりあえず、そこの長椅子にお座り下さい…。

私も、隣に座りながら、お聞きいたしますので…。

SE：木製の椅子に座る音

#左耳、通常距離に移動

#着席後、大きくため息を吐き、ゆっくりと話を切り出す

…はぁ～。

それにしても、驚きました…。

こんな夜更けに、告解室のドアを叩かれること自体が珍しいのですが、よもやその人物が、勇者様だったとは、思いもよりませんでした…。

そもそも、勇者様は、魔王との最終決戦を目前に控えているはずです。

なのに、なぜ、今になって、故郷の教会に戻られたのですか？

#突然、涙を流し始める勇者に驚き、慌てふためく

…え、あ、えぇっ…！？

ど、どうして、急に、涙を流し始めて…っ！？

…え？

も、もし、魔王に負けてしまったらと考えたら、眠れなくなってしまった、ですか…？

だから、責任に耐え切れない自分が情けなくて涙が止まらない、と…。

#勇者の心中を察し、唇を噛む

…っ。

そう、だったのですか…。

…ですが、それも仕方ありませんよね…。

このソドムの村で生まれた普通の少年が、ある日突然、伝説の勇者の血を引く者と明かされた上に、国民の期待を一身に背負わされるなんて…。

普通に考えれば、理不尽な話です…。

にも関わらず、勇者ならば弱音を吐いてはいけないと、全て抱え込んでしまったせいで、誰もその苦悩を理解してくれなかったんですね…。

#優しい声で

…でも、私は、知ってますよ…。

本当の勇者様は、内気で、優しくて、繊細な心の持ち主であることを…。

幼い頃からずっと見続けてきた私だからこそ、分かるんです。

SE：衣服が擦れる音

#近距離に移動、甘く小声で

だから、今だけは、昔に戻りましょう…？

泣いていた勇者様を、慰めていたあの時のように…。

ふふふ…よしよし…。

大丈夫…大丈夫です…。

何も心配はいりませんよ…。

嫌なことは全部忘れて、私に甘えて下さいね…。

よしよし…よしよし…。

#突如身をくねらせ、シスターから離れようとする勇者を不思議がりながらも、さらに甘く

…勇者様…？

なぜ、私から離れようとするのですか…？

ふふっ…遠慮なさらずに、もっと私に身体を寄せて下さい…。

SE：衣服が擦れる音

#耳に息が吹きかかるくらいの至近距離に移動しながら、艶かしい吐息を漏らす

んっ…ふっ…はぁっ…。

#甘くも色っぽい吐息を交えながら囁く

勇者様ぁ…。

溜まっているモノは…全部吐き出せましたか…？

もし、残っているモノがあれば…どんどん出して下さい…。

私が、一つ残らず…この身で、受けて止めてあげますからね…。

#勇者の股間の膨らみが目に入る

はぁ…んっ…ふっ…はぁ…ぇ…？

#通常距離に移動しながら

#小さく叫びながら飛び退く

ひゃ、ひゃあっ…！？

#正面、通常距離に移動

＃顔を真っ赤にしながら

あ、あの、勇者様…！

この股間の膨らみは、一体…っ！

＃何かに気づき、ハッとした表情になる

…っ！

ま、まさか、勇者様は、私に欲情なされていたのですか…？

私が、勇者様を慰めていた間、ずっと…。

＃震え声で

そ、それじゃ、今夜、私を訪ねた目的も、本当は…っ。

＃涙声で

そんな…嘘です…勇者様が、そんな…っ！

＃涙を溢れさせながら、叫ぶ

嫌…嫌ぁっ！

SE：走りながら遠ざかる足音

SE：乱暴なドアの開閉音